
Creatures Chronicle

孤者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Creatures Chronicle

【Nコード】

N8360Y

【作者名】

孤者

【あらすじ】

他サイトで書いていた内容が含まれております

とある青年の願いが偉大なる母を生み、偉大なる母が小さな災厄と大きな災厄を生み、大きな災厄が黒と金の脅威を生んだ。その流れに巻き込まれた者もいた。

果たして、彼らは救世主となるのか、それとも化け物となるのか

第一話

「おばちゃん、コロッケ五つ頂戴」

「はいよー。今日も元気そうだねえ」

「おいおい……相変わらず騒がしい場所だな」

青年はあまりにも変わっていない故郷を見て、感動を通り越して呆れを覚えた。青年にとって、ここを去ってから十二年目の帰郷となるが、目の前の光景に現実感が湧かない。土地に戻ってきたというよりも、時間に戻ってきたかのような感覚が青年を襲う。

暫くの間、奇妙な感覚に戸惑っていた青年だったが、多くの人で混み合っている中でつつ立っているわけにもいかず、とりあえずぶらぶらと歩いてみることにした。

「あ、あの惣菜屋……まだ残ってやがったのか。繁盛しやがってこのやろう」

「相変わらず忙しそうだね。無理してない？ ……はい、お代」

「はいよ。……まあ、この程度で倒れてるんなら、わたしや今頃南無三してるね」

「そろそろ本当になるかもしれないけど……それじゃまたね！」

「……ちよつと買つてくか」

自然と笑みを浮かべているのにも気付かず、小走りで惣菜屋へと近づく青年。ところが、青年は目の前から少女が歩いてきているのに気が付かなかった。少女のほうもまた同様だ。なにしろ、青年は百八十センチ超の大男。対する少女はギリギリ百三十センチとかなりの身長差がある。更に青年は惣菜屋を真っ直ぐに、少女のほうはビニール袋ばかり見ている。

そうなると、必然的に二人は激突してしまい、身長差がある二人

では

「きゃっ！」

「おろ？」

といった具合に、少女だけが倒れてしまう。気付いた青年は、当然腕を伸ばして支えようとするが、如何せん少女の背が小さすぎた。青年の腕は届かず、少女はそのまま尻餅をついてしまった。

「悪い！……大丈夫か？」

「だ、大丈夫……よつと」

心配そうに問いかける青年を制し、ゆつくりと少女は立ち上がった。それなりの勢いで転んだが、咄嗟に受け身をとったため、少女に大した怪我は無い。

しかし、青年にはそれが疑問に思えた。まあ、当然のことだろう。普通の少女が咄嗟に受け身など、到底できるはずもない。

いや、実は青年の中には、一つだけ心当たりがあった。あつたが、いや有り得ないと否定した。なにせ十二年前のことだ。もしかしたら、この少女はまだ生まれてすらいない可能性だってある。青年はそう考えたのだ。

ところが、そんな青年の考えはすぐに打ち消されてしまった。

「……あれ？もしかして……あんた日雨^{ひさめ}？！えーつと……たしか名字は遠藤だったよね？」

「……奏^{そう}、か？」

「そうそう！うわー懐かしー！……ていうか、なんで奏？あんたわたしのこと、相沢って呼んでなかったっけ？」

恐る恐る尋ねた青年　遠藤に、少女　相沢は花開いたような笑みで答える。対する日雨は、まるで世界が終わることを神に先刻されたかのような衝撃を受け、いまにも地面に倒れこみそうになっていた。まさか、幼馴染がこんなにも成長していないなどは、まるで考えていなかったからだ。

十二年前でも相沢は、確かに当時から身長が高めだった遠藤より、多少低めの身長をしていた。遠藤の脳裏には、今も「どうせ大人ん

なつてもでかくなんねーんだろーなー」と言つたことが焼き付けられている。

（だからってこれはないだろうが！ 成長してんの胸ぐらいだし！ 合法口リってやつなのか？！ そうなのかーッ？！）

「どうしたの日雨？ …… いやまあ、考えてることは大体分かつてるけどさ……ふふ」

「うつ……」

あまりにも切なそうにする相沢を見て、遠藤の中に若干の罪悪感が生まれる。ところが、遠藤がとつた行動は慰めではなかった。相沢の頬を軽くはたいたのだ。

「小せえことぐらい気にすんなよ。んなこと気にしてたら、それこそ肝っ玉が小せえと思われるぜ？」

予想していなかった行動に、驚いた顔をする相沢。しかし、相変わらず優しさの表し方が下手な幼馴染がおかしくて、先程までとは一転して柔らかい微笑みを浮かべた。

それを見た遠藤も、十二年前とのギャップに微笑んだ。

十二年前の二人の関係は、あまり微笑ましいものではなかった。幼馴染というよりも、喧嘩相手という呼び方のほうが相応しい。

なにせ、顔を合わせれば殆ど喧嘩ばかりしていたのだ。原因はいつも相沢。いいかげん止めたいと願う遠藤の鳩尾にパンチを入れようとし、それをいなされてまともな殴り合いに持ち込まれ、最後には返り討ちに遭うのが常であつた。稀に逃げ出すこともあつたが、結局は捕まってしまう、当然その後痛い目にあつていた。

それでも相沢が挑戦を止めることはなく、遂に引越し前日までその喧嘩は続いてしまったのだつた。当時、底なしの体力と桁外れの集中力を誇つていた遠藤が、精根尽き果ててぐっすり眠れていたのは、この相沢との喧嘩のおかげかもしれない。もっとも、遠藤にそのことを感謝するという考えはまったく無いが。

と、過去の思い出に浸っていた遠藤の鳩尾に、強烈な痛みが走った。原因は言わずとも分かるだろう。

「相沢アアアアアアアッ！」

「ふはははは！ 油断しているからだ馬鹿者めー！」

既に遠くにいる相沢を追おうとするが、まさかこの人混みの中を走るわけにもいかない。そのくらいの良識は遠藤にはあった。だからといって、ここで逃がすというのも少し癪に障った。

逃げる相沢を睨みつつ、色々考えた結果、仕方がないので遠藤は遠慮なく走る為に 屋根に「飛び乗った」。

けして建物は低くはなく、尚且つ人混みの中という悪条件でのジャンプだったが、遠藤はあっさりと屋根に着地してみせた。周囲の視線を痛々しく感じる遠藤だったが、今はそんなことは気にしていられないと駆け出す。その速度たるや、車を追い抜かすほどだった。無論、靴にバネが仕込まれていたりはいらない。これは遠藤の純粋な脚力によるものだ。いや、ある意味では「純粋な」脚力とは呼べないかもしれないが、遠藤自身の力であることは間違いない。

そして、相沢も既に屋根を駆けていた。その光景を殆どの人が不安そうな目で見るが、昔から住んでいる人々は驚きと、それと懐かしさを籠めた瞳で見つめている。つまるところ、二人は十二年前もこうやっていた、ということなのだが。

「待てやゴラァ！」

「待つわけないでしょバーカ！」

鬼のような形相で追いかける遠藤と、満面の笑みで逃げ続ける相沢。傍から見れば遠藤が劣勢のように見えるが、次の瞬間、そんな傍観者達の考えは覆される。（もっとも、最初にいたところからはかなり離れてしまい、事情がまったく分からない人々しか見てはいない）

なんと、凄まじいスピードで走る相沢の前に、それを遙かに上回るスピードで日雨が回り込んだのだ。

「……いよいよもって化け物ね、あんた」

「ざける。人混みの中でいきなり鳩尾殴るお前のほうが、よっぽど化け物だろうが」

刺々しい遠藤の言葉に、相沢は冷や汗を垂らしながら苦笑を浮かべる。相沢としては、このまま逃げおおせてしまうつもりだったが、だが、残念ながらそれは失敗におわってしまった。そう、「逃走」という二択のうちの二択が消えてしまったのだ。

つまり、残りの一択である「戦闘」をしなければならない。

それだけは避けたかったというのが相沢の本音だったが、もはや逃げ場はない。いや、逃げる方法が無いと言ったほうが正しいのかもしれない。逃げられないことには変わりはないが。

「行くぞクソ野郎」

「……上等よ、お天気野郎」

先に動いたのは相沢だった。先手必勝を狙ったもので、遠藤に向かって突っ込んでいくそのスピードは、とても普通の少女に男子でも厳しいくらいだが、出せるスピードでは無かった。対する遠藤は、力む相沢とは対照的に完全な脱力状態に入っていた。

遠藤を間合いに捉えた相沢が、鳩尾に鋭い拳打を叩き込もうとする。しかし、銃弾の如き勢いで迫ってくる拳を遠藤は、たいしたことではないと言わんばかりに軽く受け流した。事実、遠藤にとってはいしたスピードではない。脚力同様、動体視力も遠藤は相沢を遥かに上回っているのだ。

初撃をいなされてしまった相沢は、慣性の法則に逆らわずに真っ直ぐ突き進んでいった。下手にとどまって二撃目を打ちこもうとしても、その前に反撃を食らってしまうからだ。その判断は正しく、当の遠藤も賞賛を湛えた眼差しで相沢を見つめる。完全に上から視線であったため、相沢は喜ぶどころか憤慨してしまったが。

「あーもう、ホントむかつくわね……」

「お互い様だろ、バカヤロウ。感動の再会の後に鳩尾殴られた俺の

気持ちにもなりやがれ」

「お断り　よッ！」

勢い良く放たれた二撃目は、受け流すことを許さぬよう遠藤の体を真一文字に切る回し蹴りだった。これには遠藤も驚いたようで、瞳に少しだけ驚きの色を浮かべた。しかし、それまでだった。

凄まじいスピードで振られた右足が、遠藤の筋肉質な左腕を打とうとしたその瞬間、相沢の視界は広々とした青空へと向けられていた。

状況を飲み込めずに、暫くぼうっとしていた相沢だったが、遠藤のデコピンによって我を取り戻した。

「痛いなあ……自分の筋力分かつてる？」

「鳩尾殴られるのに比べりゃたいしたことねえよ。それに、厳密に言えば筋力じゃねえだろうが」

「……そうね」

立ち上がることなく横たわる相沢の瞳は、どこか寂しさが滲んでいるようであったが、立ち去ろうとしている遠藤がそれに気付くはずはない。そんなはずはなかったのだが、相手は先程何度も常識を覆してくれた男だ。

「そんなしんみりすんなよ。ボコさないのはただ……俺が腑抜けちまっただけだ。距離が開いたわけじゃねえよ」

自分が考えていたことを言い当てられ、驚きを隠さずに遠藤のほうを見る。しかし、今度こそ遠藤は立ち去ってしまっていた。

「……せめて、なんでわたしが倒れてるのかのネタばらしぐらいしなさいよ」

再び広々とした青空を見つめながら、一人呟いた。それが遠藤へと向けた疑問の言葉なのか、形の崩れてしまったコロツケを意識しないための誤魔化しの言葉だったのかは、本人だけが知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360y/>

Creatures Chronicle

2011年11月24日22時55分発行